

ココロつながる 笑顔ひろがる

RinRin

りんりん



別府
地獄蒸し
体験



NIPPON 発見隊がゆく



Contents

- P.2 リニューアルのお知らせ&特別プレゼント
- P.4 <NIPPON発見隊がゆく>大分県別府市泣く子も黙る別府地獄蒸しを体験する
- P.8 郵政福祉レター
- P.11 ゆうイング 契約者対象施設の紹介
- P.12 <モノのふるさとも知る旅>福島県会津若松市下駄のふるさとも鼻緒すげを体験!
- P.14 <ちよこつと健康ラボ> 第1回「眠り」
- P.16 <旬食のスズメ> 第1回「鯉」
- P.18 提携施設・サービスのお知らせ
- P.21 RinRin カルチャー倶楽部



やったね!



台選び・鼻緒選びを含め、作業工程は約2時間。桐下駄が会津の名産だと知っていたけれど、世界にひとつだけの下駄が完成すると感慨もひとしお。

体験場所



会津松本東西館
原木を切り出し、70年にわたり桐筆筒を生産。美しい桐下駄の鼻緒すげ体験も。
福島県会津若松市慶山1-14-53
TEL.0120-28-3199
http://www.kirigeta.com/
JR会津若松駅からクルマで10分。

飲み友だち仲よし4人組



白坂智典さん
喜多方下町郵便局勤務。下駄への造詣も深い、みんなの先輩。



渡部美佳さん
坂下郵便局勤務。今回の応募者。鼻緒選びも下駄完成もトップ!



片岡光太郎さん
坂下郵便局勤務。「サプライズ」にも驚かず、コツコツ取り組む。



雪野吉弘さん
坂下郵便局勤務。渡部さんと『RinRin』を眺めていて興味を持った。

体験者紹介



もうひと息



ここが大事!



これにします



あー、迷う~



⑤ 最大の難関は、鼻緒の先端の紐を台の裏側で絞る工程。ここをクリアすれば、裏に貼ったゴムの上から釘を打って完成!

④ 鼻緒の後ろの2本から台に差し入れる。深く差しすぎるとキツくなるので注意が必要。

③ 決定。いよいよ鼻緒の紐を台に通して固定する「すげる」作業を開始。

② 好みの台を決めたら、鼻緒選び。無数の選択肢から、実際に台の上のせて仕上がりイメージする。

① 宮城和子さんが下駄についてレクチャー。流線形で裏に滑り止めのゴムを貼った「右近」がいちばん人気だとか。

下駄のふるさとで 鼻緒すげを体験!

福島県会津若松市

「モノのふるさとを知る旅」。それは身のまわりにある、暮らしに根ざした「モノ」が、どこでどんなふうに使われたのか、その背景や歴史を知り、モノづくりを体験しようというもの。初回は下駄のふるさと、福島県会津若松市を訪ねました。



偶然巡ってきた 会津の名産を知る機会

「いつも、こういう体験ってどんな人が応募するんだろうって話してたんです」と言うのは、坂下郵便局にお勤めの渡部美佳さん。ある日、同僚の雪野吉弘さんと『RinRin』を眺めていたら、会津若松での「桐下駄作り体験」が目に入った。「地元だし、これは応募してもいいかも!」と盛り上がり、喜多方下町郵便局勤務の先輩・白坂智典さんに声をかけたのがきっかけ。ちなみに片岡光太郎さんには、取材の件だけでなく内容も完全に秘密という「サプライズ態勢(笑)」を敷いていたのだとか。やって来たのは「会津松本東西館」。双葉町から移築した明治時代の養蚕農家が歴史と風格を感じさせる。昔は、山から木材を切り出して卸す、会

津桐の原木屋さんだった。木の加工技術を生かし、やがて桐下駄や桐筆筒を生産するようになり、現在は桐筆筒の受注生産が中心。だが、館内では下駄の鼻緒すげも体験できる。

個性が出る鼻緒選び すげる作業には悪戦苦闘

まず、好きな台(足を乗せる部分)と鼻緒を選ぶ。白坂さん、雪野さん、渡部さんは浴衣用に昔ながらの「二枚歯」の下駄を持っているそうで、4人全員が渡部さんの「普段履きがいいな」という言葉に同調、履きやすい「焼き右近」を選んだ。そして鼻緒選び。麻乃葉、大綱などの伝統柄はもちろん、ドクロやクモ、光沢のある市松柄など数百種類も揃う豪華さ。台との組み合わせは軽く千種類を超える。台にいろいろな柄の鼻緒を合わせ、「迷う」と言

う渡部さんに、本日の講師、宮城和子さんが「迷ってください。デパートじゃ好きな組み合わせは選べないんだから」と微笑む。「すげる」とは、鼻緒の紐を台に通して固定する工程。千枚通しのような「緒通し」という工具で細かい隙間に紐を通し、縄をなうように絞る。作業に入ると、鼻緒選びの盛り上がりや嘘のように、4人とも集中モード。しかし、工程が進むにつれ「先生! 助けてください!」と男性陣は悪戦苦闘。それに比べ「なるほど、簡単!」「できたー!」と渡部さんはそして開始から約2時間後、4足

の下駄が完成した。「苦しかったですが、できあがるといいのができたなあ(雪野さん)」「従来のイメージを覆す下駄で、よかったと思います(白坂さん)」「小学校のころ、学年誌の付録がつくれなくて泣きそうになっていた自分を思い出しました(笑)」(片岡さん)「黒白赤の鼻緒しか知らなかったけど、いろいろな柄があるし、堅苦しいものじゃないんですね(渡部さん)」作業の進行には個人差があったものの、仕上がりを見せ合い、みんな満足の様子。この夏にはぜひこの会津桐下駄を履いて地元を歩きたい、と話してくれた。



このページを動画でも!
http://www.yuseifukushi.or.jp/rinrin/rinrin218.html
rinrin 郵政 検索